

市道水ヶ迫線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(伝) 六月坂横穴墓

2013年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序 文

本書は、平成 24 年度市道水ヶ迫線道路改良工事に伴い、志布志市教育委員会が実施した、六月坂横穴墓の発掘調査報告書です。

昭和 39 年と昭和 45 年に発見され、古墳時代の横穴墓の可能性が考えられていた 2 基の横穴について調査を行いました。残念ながら遺物は見つからず、横穴墓かどうかは明らかにできませんでした。

なお、この調査を機会に、明治 42 年に六月坂横穴墓から見つかった遺物を報告することになりました。県内唯一の横穴墓から見つかった資料であり、とても貴重なものです。本書への掲載を許可していただいた鹿児島大学総合研究博物館に感謝いたします。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの市民に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解・ご協力いただいた各関係機関及び発掘調査に従事・協力していただいた地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

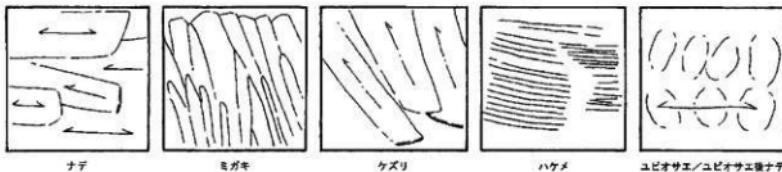
志布志市教育委員会
教育長 坪田勝秀

例　　言

- 1 本報告書は市道水ヶ道線道路改良工事に伴う六月坂横穴墓の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県志布志市志布志町安楽字船磯に所在する。
- 3 発掘調査は志布志市役所建設課の依頼を受け、志布志市教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査は平成24年10月9日から10月26日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成24年11月1日から平成25年3月28日まで実施した。
- 5 昭和39年と昭和45年に発見され、古墳時代の横穴墓の可能性が指摘されていた横穴を調査したものの、横穴墓とは明確にできなかつたため、書名を「(伝)六月坂横穴墓」とした。
- 6 明治42年に六月坂横穴墓で発見された遺物を報告している。
- 7 本書で用いた方位は全て磁北であり、レベル値は志布志市役所建設課が提示した事業実施計画図面に基づく、海抜絶対高である。
- 8 遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1:25,000地形図『志布志』、1:50,000地形図『志布志』、大日本帝國地測部発行の1:50,000地形図(明治35年測量)を利用した。
- 9 挿図の縮尺は各図面に示した。
- 10 遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
- 11 発掘調査における図面の作成及び写真撮影は相美伊久雄と坂元裕樹が行った。
- 12 遺構・遺物の実測・トレースは臨時職員の協力を得て、坂元・相美が行った。また、周辺地形図等の作成にデジタル技術を用いた。
- 13 掘出遺物の一部は、鹿児島大学総合研究博物館が所蔵しているものである。図面・写真・観察記録の掲載にあたっては、同博物館より許可をもらっている。なお、所蔵品の借用等にあたり、同博物館の橋本達也氏にはご面倒をお掛けした。
- 14 遺物の写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センターにて、吉岡康弘氏が行った。
- 15 本書の執筆・編集は相美が行った。
- 16 調査に関する図面・写真の記録類及び鹿児島大学総合研究博物館の所蔵品を除く遺物は志布志市教育委員会で収蔵・管理し、展示・活用する予定である。
- 17 報告書作成の際には、以下の方々よりご助言を頂いた。ご芳名を記することで、謝意を表します(敬称略)。
橋本達也(鹿児島大学総合研究博物館)、中村直子(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)

凡　　例

- 1 土層と土器の色調は『新版標準土色帳』に準拠した。
- 2 土器の胎土観察には、実体顕微鏡を用いた。
- 3 遺物挿図について、須恵器の断面は黒塗りしている。
- 4 土器の調整痕の表現方法は下図のとおりである。



本文目次

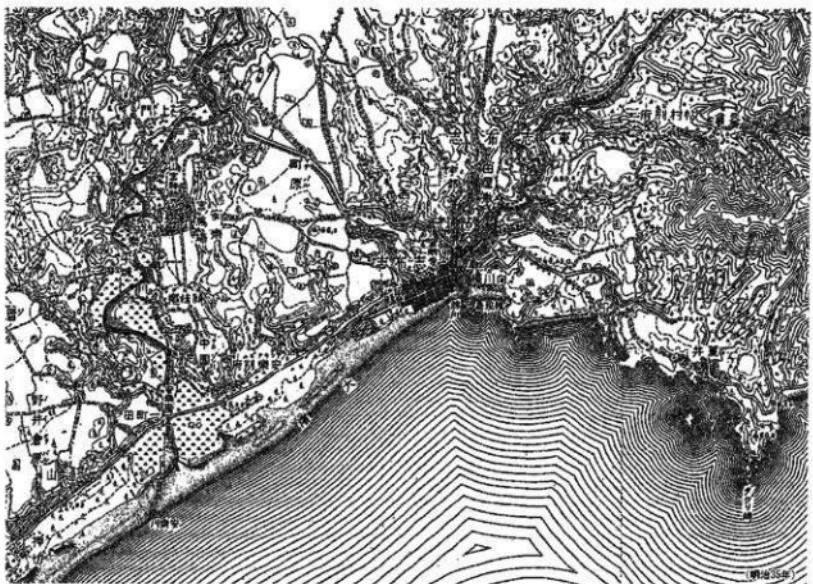
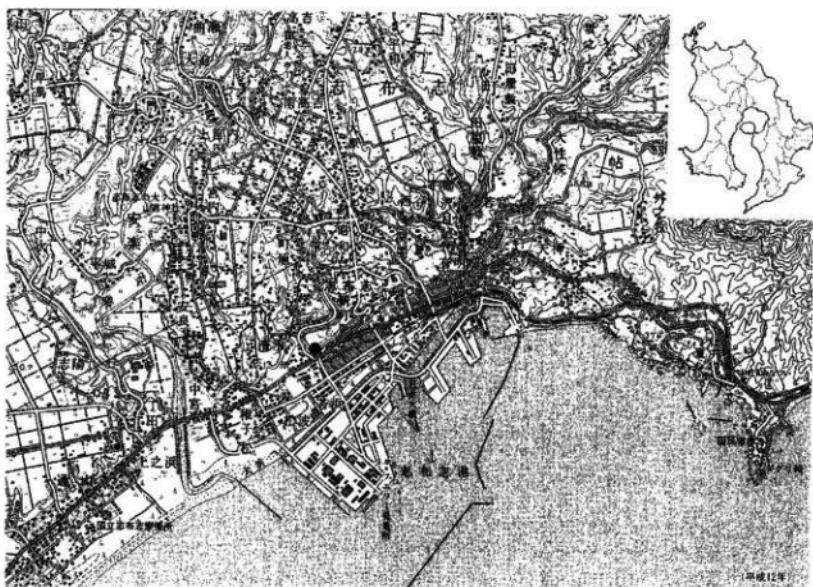
序文	
例言・凡例	
目次	
遺跡位置図及び周辺環境の変遷	
第1章 濃度の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査体制	1
第3節 分布調査	1
第4節 本調査	1
第5節 整理・報告書作成作業	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 志布志市内の古墳の概要	6
第4節 六月坂横穴墓をめぐる研究史	7
第5節 周辺遺跡の紹介	9
第3章 調査の方法	
第1節 発掘調査の方法	13
第2節 地質・地層	14
第4章 調査の成果	
第1節 横穴の調査	15
第2節 六月坂横穴墓出土遺物	17
第3節 参考資料	17
第5章 総括	
第1節 横穴について	19
第2節 六月坂横穴墓出土遺物について	19
第3節 小結	20
写真図版	21
報告書抄録	

挿図・表目次

遺跡位置図及び周辺環境の変遷(1:50,000)	3
第1図 周辺遺跡図(1:25,000)	5
第2図 六月坂横穴墓出土遺物	8
第3図 宮脇遺跡出土遺物	10
第4図 宮脇遺跡・水ヶ迫横穴墓出土遺物	11
第5図 周辺地形図(1:1,000)	13
第6図 地質模式図	14
第7図 遺構配置図(1:100)	14
第8図 1号横穴・2号横穴実測図	16
第9図 六月坂横穴墓出土遺物及び参考資料	18
第1表 周辺遺跡地名表	4
第2表 宮脇遺跡出土上器観察表	12
第3表 宮脇遺跡・水ヶ迫横穴墓出土須恵器観察表	12
第4表 六月坂横穴墓出土遺物観察表	18

写真図版目次

図版1	21
①遺跡近景(東から)	
②1号横穴現況(南から)	
③2号横穴現況(西から)	
④2号横穴前庭部トレンチ(南から)	
⑤1号横穴完掘状況(南から)	
⑥1号横穴内状況(南から)	
図版2	22
①1号横穴天井部加工痕	
②2号横穴半截状況(南西から)	
③2号横穴完掘状況(南西から)	
④2号横穴完掘状況(南西から)	
⑤2号横穴内完掘状況(南西から)	
⑥2号横穴天井部西側加工痕	
⑦2号横穴天井部加工痕	
⑧2号横穴天井部西側加工痕	
図版3	23
図版4	24
①壙(Na1)・底部内面・底部外側ヘラ記号	
②壙(Na3)・底部内面・底部外側ヘラ記号	
図版5	25
①壙(Na2)・底部内面・底部外側調整痕	
②壙(Na4)・体部外側	
③参考資料須恵器壙蓋(Na10)	
④須恵器壙蓋(Na5)・天井部内面	
図版6	26
①壙蓋(Na6)・天井部内面	
②壙蓋(Na7)・天井部内面	
③壙身(Na8)・底部内面	
④壙身(Na9)・底部内面	



遠跡位置図及び周辺環境の変遷(1:50,000)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

志布志市教育委員会(以下、市教委)は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

平成22年度、志布志市役所建設課(以下、市建設課)は志布志市志布志町安楽において、平成23年度新規事業として市道水ヶ道線道路改正工事を計画し、事業対象地内における埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会を市教委に行なった。

これを受けて、市教委は遺跡地図での確認を行なったところ、「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「六月坂横穴墓」が存在することが判明した。しかし、六月坂横穴墓の具体的な所在が不明な状態であったため、所在確認のための分布調査を平成22年3月に実施した。その結果、2基の横穴を確認した。

この分布調査を受けて、平成23年6月に市建設課と市教委は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行なった。その結果、設計変更が困難であることから、事業着手前に記録保存を目的とする発掘調査が必要となり、本調査を平成24年度に実施することが決定した。

平成24年9月、市建設課より鹿児島県教育委員会(以下、県教委)へ、文化財保護法第94条第1項に基づく「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の「通知」がなされた(平成24年9月18日付)。これを受けて、県教委から市建設課へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた(平成24年9月21日付)。そして、平成24年10月に市教委が本調査を行なった。

第2節 調査体制

1 平成23年度(分布調査)

事業主体 志布志市役所建設課

調査主体 志布志市教育委員会

調査責任者 志布志市教育委員会

教育長 坪田 勝秀

調査事務局 生涯学習課長 米元 史郎

及び 文化財管理室長

調査担当 県指定文化財係長 竹田 孝志

埋蔵文化財係長 上田 義明

主任主査 出口順一朗

主任主査 大塚 祥晃

主査 相美伊久雄

調査指導 県文化財課 中村 和美

文化財主事 上村 俊雄

鹿児島大学名誉教授 上村 俊雄

2 平成24年度(本調査及び整理・報告書作成作業)

事業主体 志布志市役所建設課

調査主体 志布志市教育委員会

調査責任者 志布志市教育委員会

教育長 坪田 勝秀

調査事務局 生涯学習課長 樺山 弘昭

文化財管理室長 竹田 孝志

埋蔵文化財係長 上田 義明

主任主査 大塚 祥晃

調査担当 主任主査 相美伊久雄

埋蔵文化財調査員 坂元 裕樹

臨時職員 追 さとみ

杉尾木の実

調査指導 鹿児島大学名誉教授 上村 俊雄

鹿児島国際大学教授 大西 智和

第3節 分布調査

分布調査は平成23年4月に、生涯学習課長及び文化財管理室の職員で実施した。昭和39年に小田寅士雄氏と上村俊雄氏によって発見されたものの、所在不明となっていた2基の横穴の確認を目的とした。調査は事業対象地におけるシラス台地の崖面を観察してまわった。その結果、複数の横穴を発見した。

この崖面には太平洋戦争末期に「洞窟陣地」が造られている。発見した横穴のうち、そのほとんどは入り形態が縦長で崖面の中腹に位置していることから、それらは洞窟陣地に伴うものと考えられた。しかし、2基の横穴は他の横穴とは形態と立地が異なる—形態は横長で崖面の裾部に位置していることから、横穴墓の可能性が考えられた。そこで、上村俊雄氏による現地視察の結果、昭和39年発見の横穴と同じものであることが確認された。

なお、平成23年7月には調査方法について、県文化財課の中村和美氏により現地指導を実施した。

第4節 本調査

平成24年9月10日～10月4日において、コンテナハウス等賃貸借の入札・契約、外業作業員の雇用手続きなど、調査開始のための準備を実施した。なお、事務所設置用地は市建設課が買収済の土地を利用した。

発掘作業は平成24年10月9日～10月26日(作業員実勤4日)に実施した。延べ作業員人数は12名、調査範囲は30 m²である。

調査対象地は竹や雑木が生い茂る荒蕪地のため、まずは環境整備を行い、調査に入った。

横穴の前底部にも遺構や遺物が発見される可能性が考

えられたことから、まず前庭部にトレントを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、基盤層(大隅階下鉄石層)の上にプラスチックなどを含む現代の層しか存在しないことが分かった。そこで、横穴前庭部の土砂や崩落している溶結凝灰岩を、重機(バックホー)を用いて剥ぎ取り、除去を行った。また、横穴入口に崩落している溶結凝灰岩もあったことから、それらは削岩機を用いて一部を削っている。

横穴内は、ビール瓶やプラスチック片、電化製品など最近のゴミが棄棄された状態であったため、それらを人力で除去した後、掘り下げを行った。しかし、横穴内の埋土からはプラスチック片など現代の遺物しか出土しなかった。掘り下げ終了後、上村俊雄氏と大西智和氏による現地指導を実施した。

なお、表土以下の地層の確認のために、重機を用いて地表面下2mまで掘り下げを行っている。

図面作成後、重機により埋戻しを行い、事業者側に現場の引き渡しを行った。埋戻しの際は横穴内に人が立ち入らないように、横穴入り前に堆土を高く盛り上げた。

なお、調査地は人家や病院の裏にあるため、事前に発掘調査を行う旨の周知を行った。また、横穴内の天井や側壁が崩落する危険性があったため、建設現場用のサポートを利用して、安全に配慮した。

発掘作業終了後、「発掘調査実施報告書」(平成24年10月29日付)を県教委に提出するなど、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

発掘調査の具体的経過は、口説抄を毎回に集約して記載する。

(10月2~5日) コンテナハウス設置(2日)、調査器材搬入、環境整備、レベル移動、2号横穴前庭部トレ

チ設定(5日)。

(10月9~12日) 2号横穴前庭部トレント掘り下げ・トレント東壁地層断面実測。1号横穴前庭部トレント掘り下げ。2号横穴前庭部重機掘り下げ、1号横穴崩落凝灰岩重機除去。2号横穴前庭部下層確認トレント重機掘り下げ。2号横穴内掘り下げ、1号横穴内掘り下げ。

(10月15~16日) 2号横穴実測、1号横穴実測。上村俊雄氏現地指導(16日)。

(10月22~26日) 周辺地形図作成。大西智和氏現地指導(22日)。調査器材撤収(25日)。埋戻し・コンテナハウス等撤収(26日)。

第5節 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は発掘作業終了後、有明文化財作業室にて行った。平成25年2月にかけて、遺構製図、実測・トレス、写真撮影、原稿執筆、編集などを行い、2月19日の印刷製本に係る契約後、本書の刊行をもって、全ての業務を終了した。なお、11月後半から12月までは和田上遺跡報告書作成業務のため作業を中断した。

また、明治42年に六月坂横穴墓から出土した遺物の報告も行うべく、鹿児島大学総合研究博物館所蔵の遺物を借用し、市教委所蔵の遺物とともに実測・写真撮影、原稿執筆を行った。

以下、具体的経過を毎月に記す。

(11月) 図面整理、遺物実測。

(1月) 遺構製図、遺物借用、遺物実測・トレス、遺物写真撮影、原稿執筆。

(2月) 原稿執筆、レイアウト・編集、契約。

(3月) 校正、遺物収納。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曾於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向かって港を開く志布志湾に面する。本市の地形は東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に砂丘海岸が続くに對し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には御在所岳(530.4 m)・笠祇岳(444.2 m)・陣岳(349.3 m)など、日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入り火碎流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主體をなす。「原(はら)」と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は、南流する前川・安楽川・妻田川など大小の河川の浸食作用による深い浸食谷(「迫(さこ)」)により細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっている。

また、このシラス台地からは、北部の霧岳(408.3 m)や中央部の岳野山(274.3 m)、西部の宇都岳(179.1 m)・草野岳(268.4 m)など、市北東部同様の日南層群が構成する山岳・丘陵が突き出ている。

海岸に沿ったシラス台地の崖下には砂丘が広がっており、この砂丘上に志布志市街地が立地している。この砂丘は発達過程により、旧期砂丘と新期砂丘に二分される。旧期砂丘は砂鉄を多く含んでおり、台地崖下に広がる。新期砂丘は旧期砂丘以南に広がっており、旧期砂丘に比べ幅が厚い。

前述の三河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。段丘崖下からの自然湧水によって低・中位段丘では集落が形成されてきた。一方、高位段丘では地下水位が深いため集落形成が困難で、近・現代に開かれるまでは畠地として利用されるにとどまっていた。

この地域の地質は古いほうから、日南層群・阿多島浜火碎流・夏井層・阿多(夏井)火碎流・旧湖口ローム層・入り火碎流・新期火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多島浜火碎流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火碎流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入り火碎流は海岸に沿った地域では海拔40 m程のシラス台地を形成する。下部には大隅降下軽石層が存在する。

六月坂横穴墓は志布志町内で最も広い平坦面をもつ町原台地から南へ延びた舌状台地の北高差約45 mの海食

崖に位置する。横穴は崖裾部の入り火碎流堆積物下部の溶結部～大隅降下軽石層に掘り込まれている。また、横穴前庭部には一部砂鉄層(旧期砂丘層)が認められている。

第2節 歴史的環境

志布志市には現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。戦前には大正5(1916)年に志布志町六月坂横穴墓について報告を行った瀬之口伝九郎氏や昭和19(1944)年に志布志町出口A遺跡採集の独鉢石を紹介した梅原末治氏の調査研究がある。戦後は、故河口貞徳氏・故原訪昭千代氏・上村俊雄氏・酒匂義明氏等の発掘調査・研究に加え、故海原原行秀氏・故瀬戸口亨氏という志布志町在住の研究者による熱心な調査・研究が行われております。学史上重要な遺跡が多い。

近年では主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。また、地域高規格道路に伴う大規模な発掘調査により、質量ともに光輝した資料が新たに追加されている。

なお、本市は現在の行政区画では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、明治4(1871)年の廃藩置県後も一時期、都城県や宮崎県に属した歴史もある。したがって、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地域の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

剥片尖頭器・角錐状石器等が出土した志布志町中頃B遺跡・松山町蕨野B遺跡、細石器が出土した志布志町追重遺跡・中原遺跡、有明町和田上遺跡などがあるものの、調査事例は少ない。

縄文時代

志布志町では故瀬戸口亨氏等の調査によって、「縄文銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期 学史上重要な志布志町東黒土田遺跡がある。隈帶文土器や舟形配石炉、貯藏穴が見つかっている。特に貯藏穴から出土した堅果類は日本最古である。向町鎌石橋遺跡でも隈帶文土器が出土している。

早期 前半期の堅穴建物や集石、連穴土坑が多数見つかった志布志町倉園B遺跡、瀬ノ神A式壺形土器等の良好な資料が出土した同町夏井土光B遺跡、連穴土坑の断ち割り調査を行い「シミ状痕跡」を初めて検出した有明町下堀遺跡、耳栓が出土した志布志町稻荷上遺跡、有明町横塚遺跡など、遺跡数が多い。

前期 曾畠式が出土した志布志町別府石鋪遺跡、野久尾遺跡、有明町本村遺跡等があるが、調査事例は少ない。

中期 この時期も調査事例は少ないので、春日式期の堅穴建物が見つかった松山町前谷遺跡、野久尾式や深

浦式・船元式が出土した志布志町野久尾遺跡など重要な遺跡がある。

後期 志布志町の中原遺跡と片野洞穴が有名である。中原遺跡では住地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田K II式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。

志布志町稲荷追遺跡では中岳II式の埋設土器が見つかっている。完形に復元できるものも出土しており、これまで全形が分かる資料がなかった中岳II式において重要な資料が加わった。この他、後期のはば全ての型式が出土した志布志町家野遺跡、独鉱石が見つかった出日A遺跡がある。

晚期 有明町井手上A遺跡や上丸遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。特に、井手上A遺跡資料は横位状態のもので類例が少なく、注目できる。

志布志町小追遺跡では黒川式干河原段階の良好な資料が認められており、クズの葉と堆積される木葉痕をもつ組織痕土器が出土している。

弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、重要な遺跡が松山町に存在する。それは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形・方形周溝墓が見つかっており、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。志布志町稲荷追遺跡では中期前～中葉の入来I・II式期の土坑墓が見つかっている。また、この遺跡では刻目突蒂文土器の良好な資料が認められている。刻目突蒂文土器が主体を占める遺跡は大隅半島では稀であり、注目される。

井手上A遺跡では中期中葉の入来II式期の堅穴建物が見つかっている。中期後半の山ノ口II式期になると堅穴建物の検出例は増加し志布志町柳遺跡、有明町長田遺跡、本村遺跡、松山町井手間遺跡、前谷B遺跡がある。井手

上A遺跡では後期中～後葉の高付式に位置づけられる壺・煮・鉢の一括資料も見つかっている。

このほか、夏井土光遺跡では柱状片岩石斧が出土している。また、県内で唯一の発見例である中庄銅鋸が有明町土橋遺跡で見つかっている。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多い。仕明遺跡では中津野～東原式期の、屋都當遺跡では辻原原～筆貢式期の、長田遺跡では筆貢式期の堅穴建物が見つかっている。志布志町でも稲荷追遺跡で筆貢式期の堅穴建物が見つかっている。

市内では林賀式新段階資料の出土例が多く、志布志町宮脇遺跡・安良遺跡、有明町上苑A遺跡・中牟田遺跡がある。「謎の7世紀」と呼ばれている時期の南九州の様相を明らかにする上で、注目される地域である。

古墳は前方後円墳である志布志町飯山古墳・小牧1号墳、市指定文化財である円墳の有明町原田古墳、そして六月坂横穴墓がある。高塚古墳以外には有明町原田地下式横穴墓・馬場地下式横穴墓群、松山町京ノ峯地下式横穴墓群がある。詳細については、第3節で述べる。

古代

志布志町水ヶ瀬横穴墓で須恵器の蔵骨器が見つかっている。墨書き土器が志布志町小追遺跡・安良遺跡、松山町牧ノ原A遺跡、有明町井手上A遺跡で出土している。このほかは、注目される調査事例はない。

中世

国指定史跡である志布志城跡が有名である。志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。

志布志城は文治5(1189)年頃の歴院院氏の居城に始まって以来、鷹井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏など数々の領主に移り変わっており、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所であった。保存整備目的で

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡番号 (ID番号)	遺跡名	所在地	縦 横 深 古 中 近	遺跡番号 (ID番号)	遺跡名	所在地	縦 横 古 中 近
1 15-112 (58-28) 大久保A	志布志町安佐字大久保	○ ○	18 15-226 (66-160) 六月堆塚大堀	志布志町安佐字大久保	○ ○		
2 15-111 (58-29) 別所	志布志町安佐字別所	○ ○ ○	19 15-237 (68-161) 水ヶ瀬横穴墓	志布志町安佐字水ヶ瀬	○ ○		
3 15-111 (58-31) 内川M	志布志町安佐字内川M	○ ○	20 15-238 (68-162) 白石古墳	志布志町安佐字白石	○ ○		
4 15-141 (59-6) 虎庄	志布志町安佐字虎庄	○ ○ ○ ○	21 15-232 (68-163) 水丸古墳	志布志町安佐字水丸	○ ○		
5 15-142 (68-62) 上原	志布志町安佐字上原	○ ○	22 15-237 (68-173) 丸山古墳 (内城) 鋼	志布志町安佐字丸山	○ ○ ○		
6 15-145 (68-65) 下原	志布志町安佐字下原	○ ○ ○	23 15-248 (68-174) 京之峰 (松尾) 鋼	志布志町安佐字京之峰	○ ○		
7 15-180 (69-113) 京之峰	志布志町安佐字京之峰	○ ○	24 15-249 (68-175) 赤丸古墳 (高城) 鋼	志布志町安佐字赤丸	○ ○		
8 15-191 (69-114) 沖跡	志布志町安佐字沖跡	○ ○	25 15-250 (68-176) 安樂塚	志布志町安佐字安樂	○ ○		
9 15-192 (69-115) 畑A	志布志町安佐字畑A	○ ○ ○	26 15-251 (68-194) 丹波塚	志布志町安佐字丹波塚	○ ○		
10 15-193 (69-116) 畑B	志布志町安佐字畑B	○ ○ ○	27 15-256 (68-195) 八ノ代	志布志町安佐字八ノ代	○ ○ ○		
11 15-194 (69-117) 畑C	志布志町安佐字畑C	○ ○ ○	28 15-277 (68-203) 志布志山古墳 (新城) 鋼	志布志町安佐字志布志山	○ ○ ○		
12 15-209 (69-132) 大久保B	志布志町安佐字大久保B	○ ○	29 15-281 (68-210) 土之井	志布志町安佐字土之井	○ ○		
13 15-212 (68-135) 柳原塚	志布志町安佐字柳原塚	○ ○	30 15-285 (68-213) 安樂塚	志布志町安佐字安樂	○ ○		
14 15-213 (68-136) 有明J	志布志町安佐字有明J	○ ○	31 15-289 (68-218) 五竈鳥巣敷	志布志町安佐字五竈鳥巣敷	○ ○		
15 15-220 (69-142) 大内	志布志町安佐字大内	○ ○ ○	32 15-290 (-) 壁面	志布志町安佐字壁面	○ ○ ○		
16 15-221 (69-144) 鶴内	志布志町安佐字鶴内	○ ○ ○	33 15-291 (-) 七之松A	志布志町安佐字七之松A	○ ○ ○ ○		
17 15-235 (68-158) 小牧1号群	志布志町安佐字小牧	○ ○	34 15-311 (-) 天塙	志布志町安佐字天塙	○ ○ ○ ○		



第1図 周辺遺跡図 (1 : 50,000)

18が六月坂横穴墓

継続的に調査が行われており、華南三彩など中世後期の中国産陶器や東南アジア産陶器が出土している。

市内にはこの他、建久(1190~1198)年間に地頭弁清使安楽平九郎為成の居城とされる志布志町安楽城跡、文治4(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に救仁郷氏の居城とされる有明町蓬原城跡などが存在する。

中世山城以外の調査事例では、志布志町安良遺跡が注目できる。この遺跡では中世前期の備前焼・常滑焼等の岡底陶器や白磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が見つかっている。安良遺跡から約1km北に位置する安楽城跡や明治26(1893)年に境内から青白磁四耳壺の藏骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見つかっている安楽山宮神社を含めて、その歴史的背景が注目されている。このほか、

有明町長田遺跡・佐明遺跡で中世墓が見つかっている。長田遺跡では玉縁口縁の白磁碗が副葬されている。

この地域は中世において、日向国諸県郡救仁院・救仁郷とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和5(1316)年のことで、「日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」(『沙苑遷正打渡状案』)とあり、万寿3(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

近世

日向国諸県郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接するところから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が立ち並ぶ「麓」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所が置かれていた。藩政

末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。これら地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。

志布志市の海岸沿いでは砂鉄が採集でき、それを用いた製鉄が行われていた。前川や安麻川上流の山麓を中心に、近世～近代の製鉄遺跡が数多く存在している。そのうち、市指定史跡である志布志町東谷製鉄遺跡では炭窯や石垣遺構、排湯場が見つかっている。

近代

太平洋戦争末期、アメリカ軍の南九州上陸作戦(オリエンピック作戦)を予想した日本軍は志布志湾岸に洞窟式の地下陣地を造った。とくに、海岸に面する台地の断崖に造成された洞窟陣地は総延長16kmに及ぶもので、全ての陣地が地下壕で連絡していた。壕は場所によっては2～3段にもなり、銃眼・砲座などの闘闘施設以外にも、炊事場などの生活施設も存在していた。また、志布志町権現島水際陣地跡も現存している陣地の一つである。

(参考文献)※発掘調査報告書は削除した。

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

海原未治 1944「大隅兔見の英形石器」『人物学雑誌』59～7

大木公人・内村公人 2012「夏井海岸の地形・地質調査報告書」

志布志市教育委員会

志布志町誌編集委員会 1972「志布志町誌」上巻

志布志町教育委員会 1982「志布志の郷土史叢書」第2集

志布志町教育委員会 1985「志布志の西郷文化財」

第3章 志布志市内の古墳の概要

飯盛山古墳(志布志町夏井)

飯盛山古墳は、志布志湾に突き出た標高約50mのダグリ岬上に位置する。昭和38(1963)年、国民宿舎建設工事によって埴丘のほとんどを失っているが、整穴式石室を主体部とする全長約80mの前方後円墳と推定されている(志布志町誌編集委員会1972)。工事の際に、壺形埴輪やガラス製勾玉などが採集されている。

平成10(1998)年には国民宿舎改築工事に伴う発掘調査が行われており、前方部側面で葺石が検出され、壺形埴輪・器台形埴輪が出土している(志布志町教委2001)。古墳時代中期前葉の時期が想定されている(橋本2010)。

小牧1号墳(志布志町安楽)

小牧1号墳は、野井舟台地から長く延びた、志布志湾に面する標高約50mの舌状台地上に位置する。昭和57(1982)年、工業用地造成中に発見された。全長約40m、最大幅約15m、高さ約2.5mの前方後円墳とされている。

埴丘上では土器や須恵器、瓦片と思われる種などが採集されている(上村1984)。須恵器のうち、TK43型式に比定可能な長脚二段透しをもつ高杯があり、古墳時代後期後半のものと捉えられている(橋本2010)。ただし、

詳細な測量調査や発掘調査が行われておらず、また須恵器も採集品であることから、明確ではない。なお、1号墳の周辺には3基の円墳の存在が推定されている。

原田古墳(有明町原田)

原田古墳は田原川東岸の標高約60mの台地縁辺部に位置する。これまで直径40m以上で県内最大の円墳とされてきたが、詳細な調査は行われていなかった。しかし、平成23・24(2011・2012)年に鹿児島国際大学の大西智和氏らにより測量調査が行われた。その結果、直径40～47mで、南西部に最大長約4.6m、幅約14.4mの造り出しをもつ、古墳時代中期の「造り出し付き円墳」の可能性が指摘されている(大西ほか2012)。

原田地下式横穴墓(有明町原田)

原田地下式横穴墓は、原田古墳から南西に約22m離れた場所にある。昭和54(1979)年、畑地の耕作中に発見された(鹿児島県教委1980)。玄室は妻入り家形を呈し、玄室内には軽石製組合石棺が認められている。その右棺内からは成人女性の人骨と刀子1点が見つかっている。古墳時代中期後半の時期が想定されている(藤井2008)。

馬場地下式横穴墓群(有明町蓬原)

馬場地下式横穴墓群は、菱田川西岸の標高約60mの蓬原台地の縁辺部に位置する。現在までに6基確認されている。このうち3基は昭和37(1962)年、県道拡幅工事中に発見されている。平入り家形の玄室をもつ墓からは人骨1体と鉄劍1点が、平入りドーム形の玄室をもつ墓からは人骨1体と鉄劍1点が見つかっている(有明町誌編さん委員会1980)。しかし、詳細は不明である。

京ノ峯地下式横穴墓群(松山町泰野)

京ノ峯地下式横穴墓群(京ノ峯遺跡)は、標高約170mの独立丘陵の西端部に位置する。平成3(1991)年度に住宅団地等の造成工事に伴う発掘調査が行われた(松山町教委1993)。

地下式横穴墓が9基検出されており、全て平入りで、玄室が箱形を呈し、狭道が認められないものである。小型で掘り込みが浅いことから、いわゆる「土塙系」の地下式横穴墓(橋本2008)である。人骨や副葬品は見つかっていない。4基は玄室入口を板石で閉塞するもので、他は閉塞材が確認されていない。弥生時代中期の円形周溝墓との切り合いが認められ、注目された。

(別文書)

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

大西智和・僅ヶ江賛一・松原大輔 2012「志布志市有明町原田古墳の測量調査」『鹿児島考古』42 鹿児島県考古学会

鹿児島県教育委員会 1980「人跡海岸埋蔵文化財分布調査報告書」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書13

上村俊雄 1984「鹿児島県」『古代学研究』102

志布志町教育委員会 2001「飯盛山古墳」志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書29

志布志町誌編集委員会 1972「志布志町誌」上巻

橋本達也 2008 「第2章古墳時代墓制としての地下式横穴墓」『大隅半島周辺古墳群の研究』鹿児島大学経済研究部論叢

橋本達也 2010 「九州南部の古墳墓系譜と古墳墓以外の墓制」『九州における古墳墓系譜の再検討』九州前後円墳研究会

藤本大祐 2008 [第1章] 国崎町 18号墳地下式横穴墓の解説 「大隅半島周辺古墳群の研究」鹿児島大学経済研究部論叢

松山町教育委員会 1993 「京ノ墓遺跡」松山町歴史文化財発掘調査報告書 7

第4節 六月坂横穴墓をめぐる研究史

六月坂横穴墓は明治42(1908)年に、旧制県立志布志中学校の敷地内に見つかり、発見されたものである。

大正5(1916)年、旧制県立志布志中学校教諭の瀬之口伝九郎氏が大崎町横瀬古墳について発表されたものを見た、志布志町在住の伊地知兵十郎氏が六月坂横穴墓の存在を瀬之口氏に連絡したことから知られるようになった。

その瀬之口氏は大正5年5月19日に新聞発表を行っている。その全文が、志布志町教育委員会によって昭和57(1982)年に刊行された「志布志の郷土史読本 第2集」に掲載されているので、以下とのとおり、再録しておく(掲載原文のまま)。

明治42年志布志中学校、当町六月坂の地に愈々敷地を地平にするにあたり、学校の北方なる六月坂町原丘陵の一角を崩して持ち運ぶことになった(当町町内居住者の奉仕作業、從事者の口伝では、モッコ遊びで運動場に厚さ1.5mぐらいの土を運んだという)。今しも志中寄宿舎(現香月小学校敷地である)の上に上げる施設は其遺跡である。志布志町志忠志字外堀 1960番地-当町の二合目位の所に数個の横穴があった。人口は山5尺位で奥へ7尺位、高さは6尺位である。古老に聞くと以前は10数個あったといい。例の狸の穴ではないか、狐の巣位に思っていたらしい。若しこの土砂運搬に依って穴の下底にある土器10数点がなかったならば、今に於て横穴古墳などの断定はつかぬ筈であった。よし之等の土器を見出しながら、心なき人びとの者の手に任せたならば、何として此處に横穴古墳があった事が分からう。然るに志中開校以来多大の好意を寄せられる当町伊地知兵十郎氏は、当町この土器発掘あるを聞くや急進來りて之を收拾し、人夫等が持ち去りしものもわざわざ人を派して之を收め置き、あけて開校後の志布志中学校に寄贈せらることとなったのである。

之等土器は考古癖ある子(山県立志布志中学校教諭瀬之口伝九郎氏で本稿の筆者である)をして赴任当時より感興を起こさしめぬでもなかつたが、当県下には古墳はないしも-(当時古墳はないものとされていた)-古墳遺物丈ならば大隅にも曾於・肝付両都の如き其存在を以て一般に認められていたから、格別の注意を払わなかつたのであるが、先般予が横瀬古墳の発表した後に於て、伊

地知氏より右発掘当時の模様を聞いて始めて横穴古墳の検出をなし得た次第である。予は此発表をなすに至って伊地知氏に深く感謝の意を表するものである。

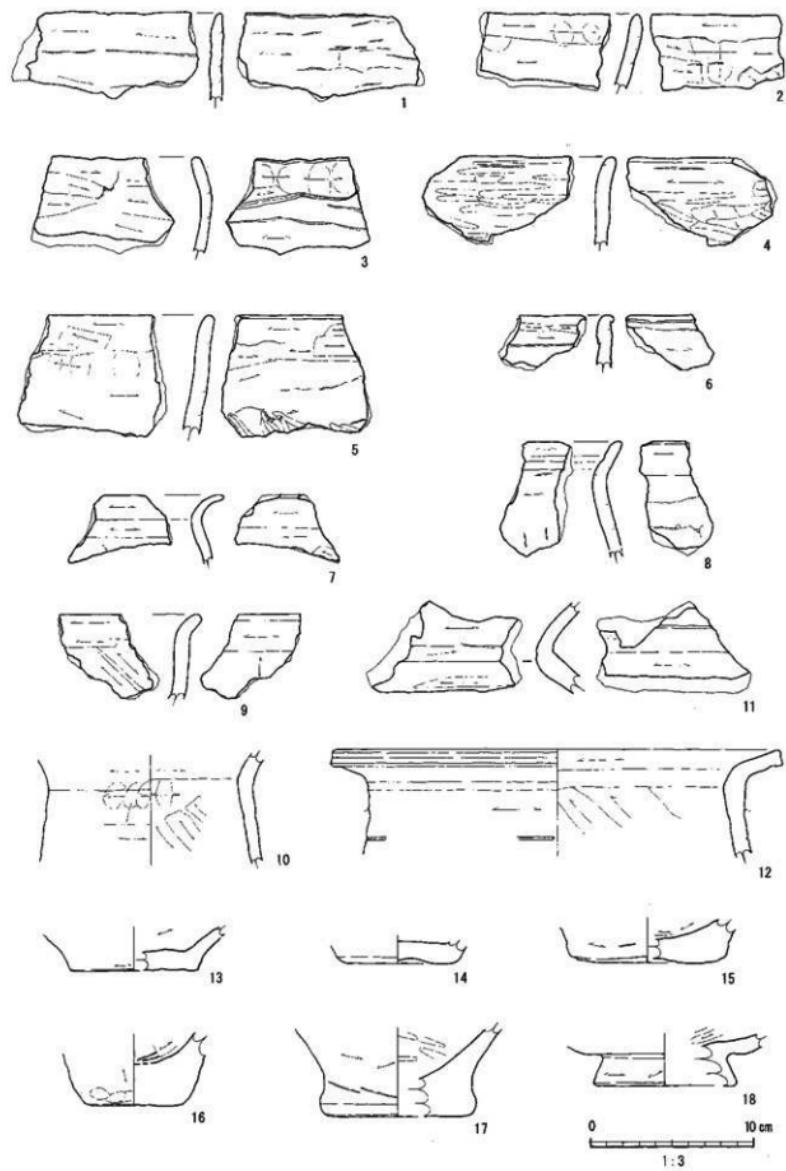
さて此六月坂横穴古墳は右述ぶるが如く、極めて簡単なる構造で、宮崎県宮崎郡内、蓮ヶ池地方にある様な稍々複雑したものではなかつたらしい。今志布志中学校に藏する之等の遺品に就て述べよう。イ・ロ・ハ・ニは素焼

●「隋」の右半分+赤(あかへん):編者註 色の杯である。イ・ロ・ハは非常に緻密な土を用ひてある。ニは稍々すけた様に何か滲じんでいる。ホは蓋杯である。トは壇である。能く云う朝鮮土器で、内部には同心円の波紋がある。ヘ・ルも杯の蓋である。ルは径六寸五分に及び一寸珍品であるが、惜しいことには受の方がない。チは高杯である。リは先般予が見つけた破片で、塙か壊かの一部であろう。図は其波紋を見せた所である。ヌは直刀の一片である。ヲ・ワはもと同一であった、其破片を示したもので、土碟を圓の如く囲め、その先端より中心を通じてある。一寸名詔用途の分からぬものである。

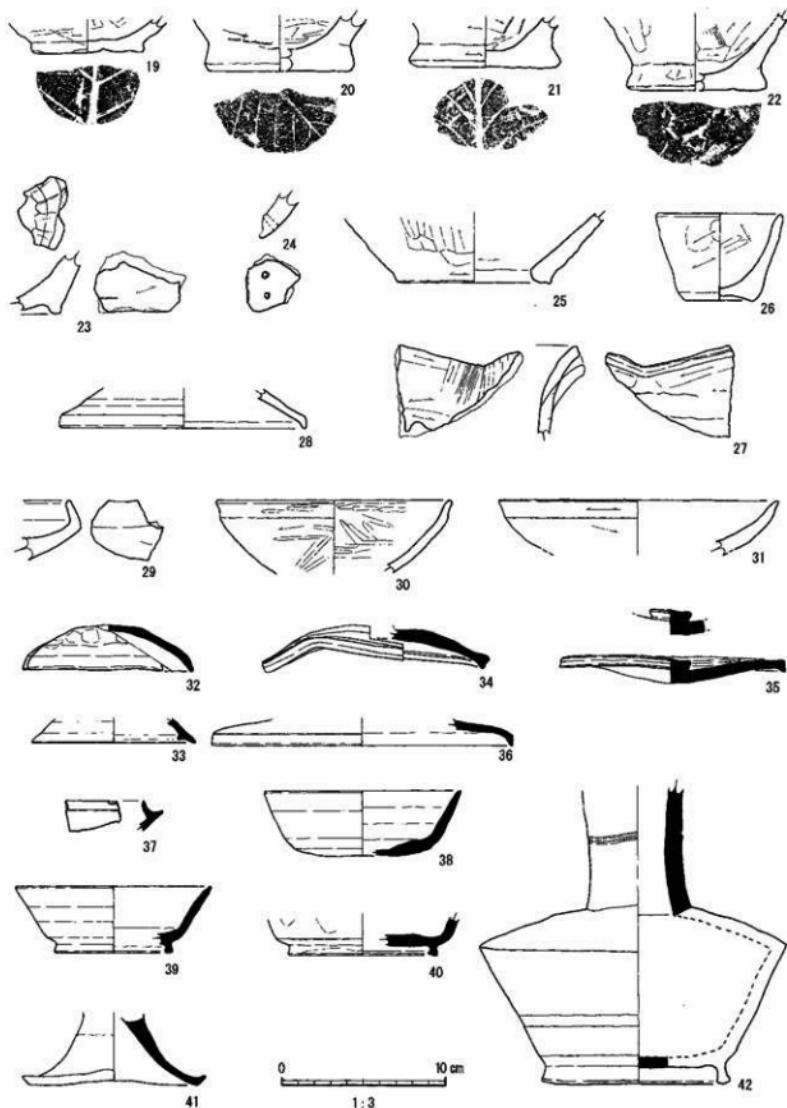
以上は図よりありふれたものであるが、横穴を断する必要より稍々詳しく述べたのである。

この外穴のあるものには人骨が比較的完全に保たれていたが、図には出さなかった。宮崎辺の横穴に就いて云ふと、穴の奥にあるべき筈の死体は年数を経るの久しきため、無論形を止めようになつてゐるが、此処のは火山灰地だけに溝地が下に通つて完全に保たれたかも知れぬ。又併し、多分は窓が開いたる穴の間かられて後のものであつたろうと思う。古老的言によれば、六月坂の地は4~50年前には砂鉄を取つた所で、能く底の据らぬ蓋を掘り出しても叩き破つたものだと云う。して見れば、もっと多く横穴と其遺品があつた筈である。實際横穴は1所に多数あるが通例であるから案外多かったかも知れない。中学校の工事の為に斯る史跡の湮滅したのは如何にも残念の次第であるが、伊地知氏により遺品を通じて研究の出来るのは何よりの仕合せである。為に一寸申し述べ置きたいのは、先般宮田博士の「太古の九州民族」という記事のうちに、堅穴横穴の文字が見えて居るが、あれは円墳、又は瓢形墳(前方後円墳のこと)の所謂塙につい云はれた事で、唐仁町や横瀬の大瓢墳の如き、縦塙、堅穴と云ひ、大河内地方や九州では肥後・豊後又は日向地方(西都原鬼の塙の如き)にある。漢道や玄室であるのを横穴と云はれたので、本篇述ぶるものと混同してもらわぬように願つて置く。即ち予が述べた横穴と云うのは山腹に掘込んで構造された彼の武蔵古見の百穴の様な、在来一般に横穴と称するものである事を知られたい。

この発表によれば、出土遺物(第2図)は素焼き壺4点(イ・ロ・ハ・ニ)、須恵器?蓋3点(ホ・ヘ・ル)、須恵



第3図 言路遺跡出土遺物



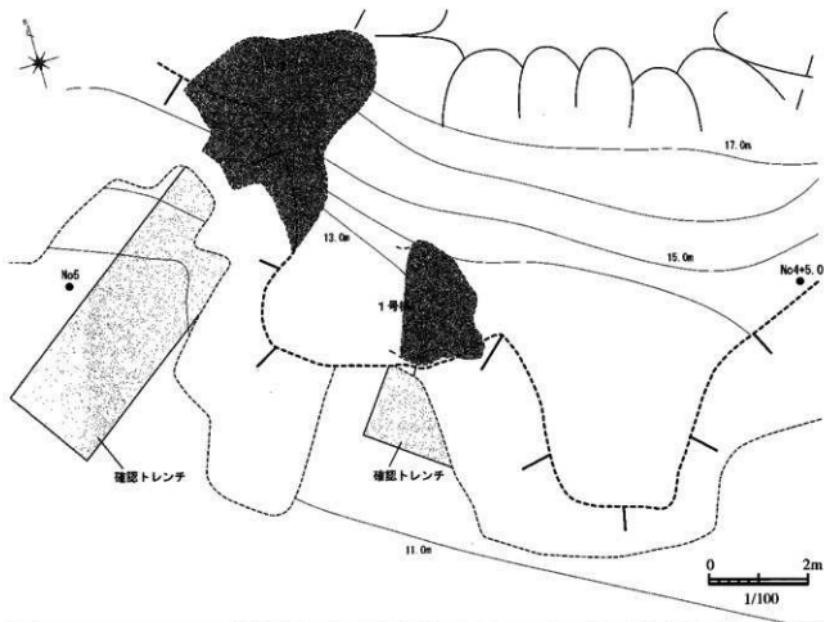
第4図 宮殿遺跡・水ヶ迫横穴墓出土遺物

第2節 地質・地層

横穴は標高約45mのシラス台地を形成する入戸火砕流堆積物下部の溶結部～大隙降下軽石層を掘り込んでつくられている。横穴の天井部から剥離上位は溶結部、側壁下位～床面は大隙降下軽石層となる(第6図)。また、1号横穴前庭部には旧期砂丘層の砂鉄層が認められた。



第6図 地質模式図



第7図 造構配図 (1 : 100)

第4章 調査の成果

第1節 横穴の調査

1 調査の概要

昭和39(1964)年及び昭和45(1970)年に発見され、横穴墓とされた2基の横穴が調査の対象である。また、墓前祭祀が行われた可能性や現況の横穴が横穴墓の玄室に相当し、築造時には存在していたと思われる羨道部の天井が既に崩落または削平されている可能性も考えられたため、横穴の前庭部も調査の対象とした。

調査の結果、前庭部及び横穴内からは遺物は認められず、また時期的に古いと考えられる地層も認められなかった。

2 1号横穴(第8図)

調査前状況 前庭部には崖面から崩れた土砂や凝灰岩が高く盛り上がっており、天井から崩落した大きな凝灰岩が横穴入口をふさいでいる状況であった。

前庭部 トレンチを設定し、掘り下げを行った結果、黄褐色(2.5Y4/1)を呈する厚さ約20cmの表土の下に、基盤層となる灰白色(2.5Y8/2)を呈する大隅降下鉢石層が認められた。一部、その上位には砂鉄層もみられた。表土からは遺物は認められなかった。前庭部には表土層しか存在していないことが判明したため、前庭部の土砂と凝灰岩を重機により除去した。

横穴残存状況 横穴入口をふさいでいた凝灰岩の一部を削岩機で削り、横穴内に入った。横穴の入口側は天井が崩落しており、樹根により天井が保たれている状態であった。横穴内の西半は崩落した凝灰岩により埋まっていた。横穴内は現代(昭和50年代後半)のビール瓶やお菓子袋などのゴミが散乱していた。それらのゴミを除去した後、掘り下げを行った。

埋土 横穴西半は崩落した岩により調査が不可能であったため、東半のみを掘り下げた。埋土は單一層で、厚さ約40cmを測る。灰白色(2.5Y8/1)のシルト質土で、シラスや軽石を含み、しまりはない。ビール瓶や瓦などの現代の遺物も混じっている。なお、横穴奥には炭化物や焼土が認められたことから、横穴内でゴミ等を燃やした可能性がある。

規模・形態 横穴西半は調査できず、また天井入口部は崩落しているため、元来の規模は分からぬが、現況の規模は幅 $150 + \alpha$ cm、奥行250cm、高さ $150 + \alpha$ cmを測る。なお、横穴内の観察によれば、やや横長の形態を呈する。方位はN-30°-Eである。

天井-側壁上位は入戸火葬流堆積物の溶結部で、側壁下位-床面は大隅降下鉢石層となる。床面は前庭部床面より10cm程低くなり、ほぼ平坦である。

加工痕 側壁には10~15cmの奥行をもつ四角形状の掘

り込みが複数認められた。側壁中央-東半部で8ヶ所確認できた。天井の一部に南北方向にのびる工具痕が認められた。工具幅は25~30cmである。

3 2号横穴(第8図)

調査前状況 前庭部には崖面から崩れた土砂や凝灰岩が高く盛り上がっており、横穴入口は約50cmの隙間しか存在しない状況であった。そして、横穴内には土砂が流れ込んでいた。また、前庭部や横穴内には空き瓶や空き缶、そしてプラスチックやテレビなどの粗大ゴミが廃棄されている状況であった。

前庭部 トレンチを設定し、掘り下げを行った結果、黄灰色(2.5Y4/1)を呈する厚さ約20cmの表土(1層)が認められた。表土にはプラスチック片などの現代の遺物が混じっている。この表土は横穴に向かって次第に厚くなっていく(最大厚約40cm)。

横穴入口付近には表土下位に浅黃褐色(7.5YR8/3)のしまりのない砂質土層(2層)と黒褐色(7.5YR3/1)のしまりのないシルト質土層(3層)が認められた。なお、2・3層から遺物は出土していない。基盤層は灰白色(2.5Y8/2)を呈する大隅降下鉢石層(4層)である。

前庭部では近代以前の遺物は出土せず、時期的に古いと考えられる地層も認められなったことから、前庭部の土砂と凝灰岩を重機により除去した。

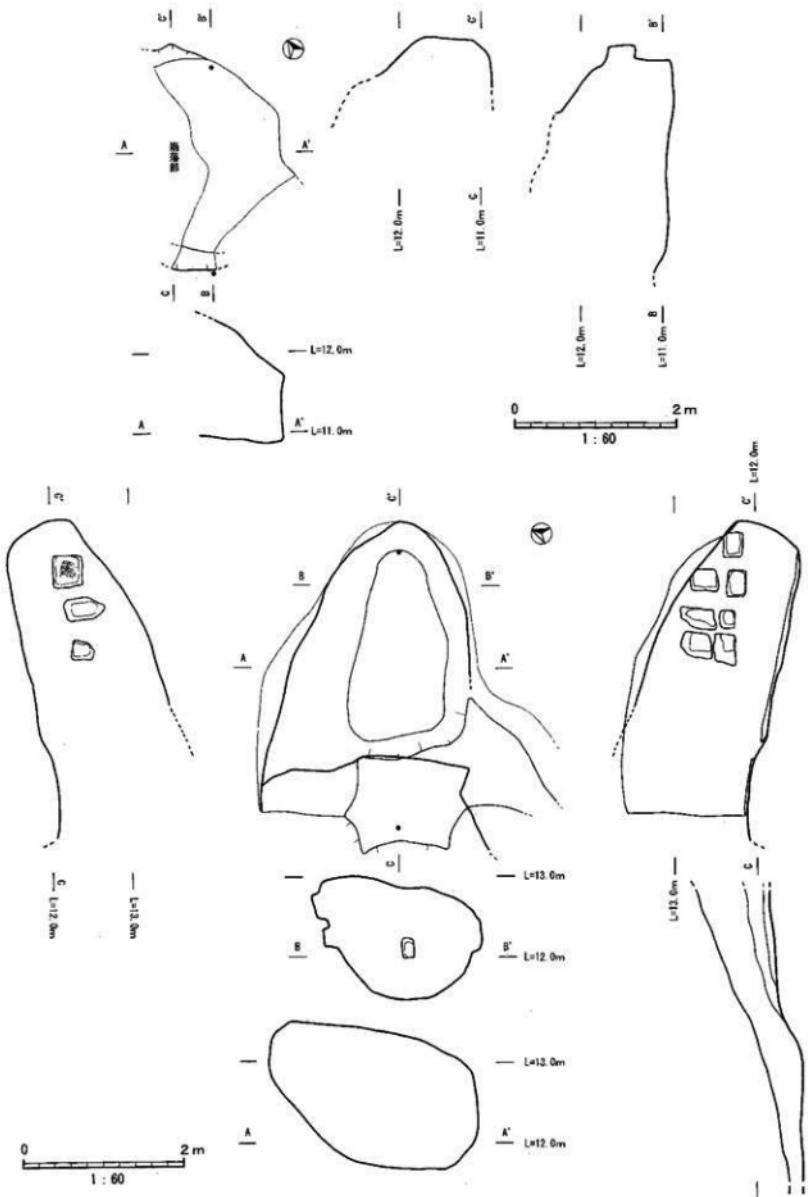
横穴残存状況 横穴の天井や側壁は崩落しておらず、1号横穴に比べて残存状況は良かった。横穴内には現代のゴミが廃棄されていたため、それらを人力で取り除いた後、半裁法で西半を掘り下げた。

埋土 埋土は單一層で、厚さ約25cmを測る。黄灰色(2.5Y4/1)のシルト質土で、シラスや軽石を含み、しまりはない。プラスチック片などの現代の遺物が混じる。

規模・形態 最大幅250cm、奥行360cm、最大高160cmを測り、奥に向かってすぼまる形態となる。入口東側は深くえぐれているが、元々そのような形態なのか、崩落したためなのかは判然としない。方位はN-68°-Eである。

天井-側壁上位は入戸火葬流堆積物の溶結部で、側壁下位-床面は大隅降下鉢石層となる。床面は前庭部より25cm高く、横穴奥に向かって下がっていく(比高差65cm)。天井も奥に向かって低くなっていく。

加工痕 側壁には10~15cmの奥行をもつ四角形状の掘り込みが複数認められた。奥正面に1ヶ所、東側壁に3ヶ所、西側壁に7ヶ所である。天井及び側壁には加工痕が残る。西側壁上部は側壁に対して平行に削っている。天井部入口付近は天井部に向かって削っている。全体的に幅14cm程の工具を用いている。



第8図 1号横穴・2号横穴実測図

第2節 六月坂横穴墓出土遺物

ここでは明治42年に六月坂横穴墓において見つかった資料を紹介する。内訳は土器が4点、須恵器が5点である。なお、1・2・4～6・8が鹿児島大学総合研究博物館所蔵、3・7・9が志布志市教育委員会所蔵である。また、1・4～6・8は橋本達也・藤井大祐両氏報告の実測図を再トレースしたものであり、2は再実測したものである。

1 土器（第9図1～4）

全て壺である。これらは底部内面や口縁部内面、体部外面に「明治四一年秋 六月坂ニ於テ發掘土器七個伊地知兵十郎寄附」という注記がある。

1は底部から「ハ」字状に広がり、口縁端部でやや外反する。外面に粘土帶接合痕が認められ、粘土帯幅は2.0cmである。内外面ともに丁寧なナデ調整が行われる。底外面に「×」字状の浅いヘラ記号が認められる。口径15.3cm、器高6.0cm、底径7.0cm。

2は底部から内湾状に立ち上がるものである。外面に粘土帶接合痕が認められ、粘土帯幅は1.4cmである。口縁部は横位のナデ調整が行われ、擦痕が残る。体部以下にはミガキ調整が行われる。内面は口縁～体部にナデ調整が、底部内面にはミガキ調整が行われる。底外面にはタタキ裏のような平行に並ぶ筋が認められ、その後ナデ・ミガキ調整が行われている。なお、口縁部内面と底部内面に赤色顔料が塗布されていたと考えられ、わずかに残存している。口径16.9cm、器高5.2cm、底径6.5cm。

3は底部から直立気味に立ち上がり、口縁端部で「く」字状に外反する。外面は口縁部にヨコナデ調整が、体部以下にはミガキ調整が行われる。内面はヨコミガキ調整とヨコナデ調整が行われる。底外面に「×」字状の浅いヘラ記号が認められる。口径10.8cm、器高5.4cm、底径5.4cm。

4は丸味をもつ底部から内湾状に立ち上がる。外面に粘土帶接合痕がわずかに認められる。底面はユビオサエによる凸凹がみられる。外面はミガキ調整が、内面はヨコナデ後ミガキ調整が行われる。赤色のクサレ様が目立つ。口径12.7cm、器高5.9cm。

2 須恵器（第9図5～9）

壺蓋が3点、坏身が2点である。これらは内面に「志布志 六月坂」という注記がある。

壺蓋（5～7）

5は天井部が丸みを帯び、口縁部内面にかえりをもつ。かえりは口縁部以下に突出しない。つまみは貼付されない。天井部外面はヘラ切り未調整である。内面は回転ナデ調整後、天井部内面に不定方向のナデ調整を行う。5mm弱の縫をわずかに含む。口径10.8cm、器高3.1cm。

6は天井部がやや平らで、その中央に宝珠つまみをもつ。口縁部内面にかえりをもち、かえりは口縁部以下に突出しない。天井部は丁寧な回転ヘラケズリ調整を行う。

外面に自然縫が掛かる。内面は回転ナデ調整を行う。胎土中に3mm程の石英粒をわずかに含む。口径11.0cm、器高2.4cm。

7は天井部が扁平で、口縁端部が「し」字状に届曲するものである。口縁部内面にかえりはない。天井部中央に擬宝珠つまみをもつ。つまみは扁平で、中央部がやや突出している。天井部外面は丁寧な回転ヘラケズリ調整を行う。内面は回転ナデ調整後、不定方向のナデ調整を行う。なお、内面に赤色顔料が認められる。口径19.4cm、器高2.5cm。

坏身（8・9）

8はたちあがりが短く内傾し、上方へ屈曲して端部は丸くおさめる。底部は丸味を帯びる。受部外面には一部縱位のナデ調整が行われる。内面は回転ナデ調整後、底部内面に不定方向のナデ調整を行う。口径12.0cm、受部径14.1cm、器高4.5cm。

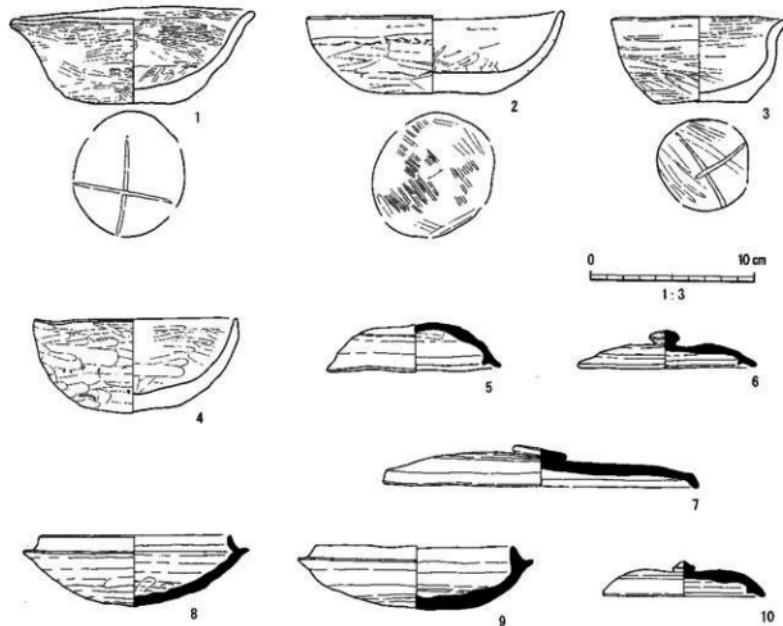
9はたちあがりが短く内傾し、端部は丸くおさめる。たちあがりはやや厚手で、断面三角形状となる。底部はやや扁平である。底部外面はヘラ切り未調整である。内面は回転ナデ調整後、底部内面に不定方向のナデ調整を行う。口径12.1cm、受部径14.5cm、器高4.0cm。

第3節 参考資料

六月坂横穴墓出土遺物の可能性のある資料－須恵器壺蓋－を紹介する（第9図10）。

この資料には「志布志 六月坂」のような、六月坂横穴墓にかかる注記が認められない。しかし、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏によると、諫訪昭千代氏による寄贈品の中で六月坂横穴墓出土資料と同時期のものはこの資料以外には認められないことから、六月坂横穴墓出土資料の可能性を考えられるということであった。また、この資料は約1/2を欠損しており、その欠損部に注記が存在した可能性も考えられるということであった。

10は天井部がやや平らで、その中央に宝珠つまみをもつ。口縁部内面にかえりをもち、かえりは口縁部以下に突出しない。天井部は丁寧な回転ヘラケズリ調整を行う。内面は回転ナデ調整後、不定方向のナデ調整を行う。口径10.0cm、器高2.2cm。



第9図 六月坂横穴墓出土遺物及び参考資料

第4表 六月坂横穴墓出土遺物観察表

序号	No.	分類	種類	時期	外因発生	内因構造	遺伝構造	外因生成	内因色調	備考
1	土器部	环	-	ヨコナガキ	ヨコナガキ	ヨコナガキ	ヨコナガキ	にほん青磁 (10YR5/4)	黄緑 15.5cm 高径 6.0cm 幅 7.0cm	L188.4cm 備高 6.0cm 高径 7.0cm
2	土器部	环	-	ヨコナガキ (ナギリ模)	ヨコナガキ (ナギリ模)	ヨコナガキ (ナギリ模)	ヨコナガキ (ナギリ模)	青 (SYR6/6)	青 (SYR6/6)	L189.6cm 備高 5.0cm 高径 6.5cm 青色と黄色の斑状混在
3	土器部	环	-	ヨコナガキ、ミコナガ	ヨコナガキ、ミコナガ	ヨコナガキ、ミコナガ	ヨコナガキ、ミコナガ	にほん青磁 (10YR6/4)	淡青緑 (10YR6/2)	H186.0cm 備高 5.4cm 高径 5.4cm
4	土器部	环	-	ミコナガ	ミコナガ	ミコナガ	ミコナガ	にほん青 (7YR7/4)	青 (7YR7/4)	H185.4cm (7YR7/4) H186.0cm 備高 5.9cm
5	陶器部	耳杯	TNK21	輪郭式	輪郭式	輪郭式	輪郭式	輪郭式 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)
6	陶器部	耳杯	TNK21	輪郭式	輪郭式	輪郭式	輪郭式	輪郭式 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1) L186.0cm 備高 3.1cm
7	陶器部	耳杯	TK207	一輪型式	輪郭式	輪郭式	輪郭式	-	灰 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)
8	陶器部	耳杯	AT-21	輪郭式	輪郭式	輪郭式	輪郭式	-	灰 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)
9	陶器部	耳杯	TK209	輪郭式	輪郭式	輪郭式	輪郭式	-	灰 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)
10	陶器部	耳杯	TK207	一輪型式	輪郭式	輪郭式	輪郭式	-	灰 (7YR5/1)	灰 (7YR5/1)

第5章 総括

第1節 横穴について

昭和39(1964)年と昭和45(1970)年に発見され、横穴墓の可能性が指摘された2基の横穴の調査を行った。

1号横穴について、横穴の前庭部や横穴内からは古墳時代、ひいては近代以前の遺物は全く認められず、時期的に古いと考えられる地層も認められなかった。また前庭部には旧期砂丘である砂鉄層が認められたことから、築造部が削平された可能性は考えにくい。

2号横穴についても、遺物や地層に関しては1号横穴と同様であった。形態は奥に向かって下がり、床面は奥に向かって下がり、天井も下がっていく。このような形態は一般的な横穴墓には認められないものである(九州前方後円墳研究会2001)。

以上のように、横穴内や前庭部に遺物や古い地層が認められないこと、そして構造から2基の横穴が横穴墓であった可能性は低いと考えられる。志布志町夏井海岸では大隅降下軽石層が海蝕されてきた空洞が認められる。そのような空洞を利用した何らかの目的を有する横穴、あるいは墓以外の目的で掘られた横穴の可能性が考えられよう。

とは言うものの、元々横穴墓であったものを後世に改変したために、遺物や地層が認められず、そして構造が変わってしまった可能性も捨てきれない。

したがって今回の調査結果としては、2基の横穴を横穴墓とは明確にできないというものにとどめたい。

なお、2基の横穴とともに側壁に四角形状の掘り込みが複数認められた。これらは西洋建築でみられるような壁面の一部をくぼめて彫像などを置く「壁龕」に類似する。のことから、近世の「隠れ念仏」に関する遺構の可能性も考えたものの、志布志地域では隠れ念仏の伝承はなく、また近世の遺物も認められなかったことから、隠れ念仏との関係は薄いであろう。

第2節 六月坂横穴墓出土遺物について

今回、明治42(1908)年に発見された六月坂横穴墓の出土遺物の報告も行った。それらは土器が4点、須恵器が5点(坏蓋3・坏身2)である。また、六月坂横穴墓出土遺物の可能性も考えられる須恵器坏蓋が1点存在する。以下、それらの時間的位づけや内包する問題点などについて述べていく。

時間的位置づけ まず須恵器の坏蓋について、6と10は宝珠つまみと短めのかえりから、TK217~TK46型式/飛鳥Ⅲ期/陶邑Ⅳ新段階~陶邑Ⅴ古段階(佐藤2003)に比定できる。5は短めのかえりをもつことから、6と同時期のものであろう。7は天井部が扁平で、扁平な擬

宝珠つまみをもち、口縁端部が「L」字状に屈曲し、かえりがない特徴から、MT21型式/平城Ⅱ期/陶邑Ⅴ新段階(佐藤2004)に比定できる。

次に坏身について、8はたちあがりの特徴や丸味を帯びる底部から、TK43型式/陶邑Ⅲ新段階に比定できる。9はたちあがりや扁平となる底部、そして底部外側がへラ切り未調整となる特徴からTK209型式/陶邑Ⅳ古段階に比定できる。

坏身と坏蓋は若干時期差があるものの、8・9のような坏Hと6・7・10のような坏Gは共伴すると考えられており、また坏Hに複数の口縁部径が共伴するとの指摘もあることから(佐藤2003)、8・9が時期的に下る可能性もある。また、北部九州では5のようなつまみのない坏G(逆巻した坏H)が存在しており、つまみのある坏Gと共に存している(舟山1997)。

したがって、時期的に新しい7を除けば、おおむねTK217~TK46型式/陶邑Ⅳ中~Ⅴ古段階、つまり7世紀前~後半を中心とした時期に位づけられると考えたい。なお、7は8世紀前半頃に位置づけられる。

次に土器について、坏が4点出土しており、4を除いて1~3は平底となる。

志布志地域では平底となる底面に木葉痕が残り、内外器面の接合痕が顕著である壺が認められており、宮崎平野地域との関係が指摘されている(志布志市教委2012)。その宮崎平野地域では、坏が平底化するのは今塙屋駿行・松永幸寿編年の7期以降(TK43~209型式併行期以降)のようであり(今塙屋・松永2002)、須恵器の時期とおおむね調和的である。

これら出土遺物は一つの横穴墓ではなく複数の横穴墓から出土した可能性も考えられよう。また新しいものはMT21型式併行期の須恵器も認められるが、それは追葬時(橋本2012)や築造停止後の墓前祭祀時の供品と想定される。

内包する問題点 今回報告した六月坂横穴墓出土遺物には幾つかの問題点が存在する。

まずは出土遺物の点数の問題である。今回報告したのは9点、参考資料を合わせて10点となる。大正5(1916)年の瀬之口伝九郎氏の報告では、素焼き坏4点、須恵器?壺3点、須恵器壺2点、直刀片1点、高坏1点、その他不明遺物2点、合計13点出土したとされている(志布志市教委1982)。

土器の坏については4点で一致するものの、須恵器に関しては一致しない。この理由として、瀬之口氏の報告後に須恵器が新たに発見され、旧制志布志中学校に寄贈された可能性が想定できる。その他の遺物については所

在不明になったのであろう。

また、土器4点には「明治四一年秋 六月坂ニ於テ発掘土器七個内 伊地知兵十郎寄附」と注記されており、7個発見されたことがうかがえるが、点数が一致せず、逆に増加している。

つまり、点数が一致しないのは伊地知氏以外からも遺物が寄贈された可能性が考えられる。

次に遺物の注記について、この問題に関しては藤井大祐氏ら、土師器と須恵器では注記内容が異なり、筆跡も異なることを指摘している(橋本・藤井2007)。注記内容や筆跡が異なる理由は分からぬが、注記された時期が異なる可能性が考えられる。

また、須恵器に注記された「六月坂」が六月坂横穴墓を示していない可能性ー六月坂横穴墓以外から出土した資料が混在し、それらに「六月坂」と注記されている可能性ーも考えられよう。

しかし、参考資料を除けば全て完形品であり、集落遺跡等で出土したものではなく、横穴墓の出土遺物であった豪華性は高い。7はつまみと体部との隙間に砂粒が残っており、大崩落下鉛石層の砂粒と類似する。また内面に赤色顔料が塗されている。これらのことから、7は六月坂横穴墓から出土した可能性が高い。

なお、瀬之口氏報告の「ル」(环蓋)は直径が6寸5分、つまり約19.5cmであり、7とはほぼ同じ大きさである。また「二」(素焼き坏)は焼けたような器面ということであり、空腹感が3に似ている。

第3節 小結

今回の調査結果から、2基の横穴を横穴墓とは明確にできなかった。とは言え、7~8世紀前半に位置づけられる遺物の存在から、六月坂の地に横穴墓が存在している可能性は高いであろう。

横穴墓現存の可能性 瀬之口氏の報告では、旧制志布志中学校の敷地整地の際、運動場に厚さ1.5m程の土を運んだとされるため(志布志町教委1982)、崖面をかなり削平したと考えられる。また、築造箇所が崩れやすいシラス台地の崖面であり、さらにこの周辺は早くから造成や宅地化が進んでいることから、横穴墓が現存している可能性はかなり低いと思われる。

周辺遺跡との関係 本遺跡から北西に1.7kmに位置する宮脇遺跡では六月坂横穴墓とほぼ同時期の須恵器が認められる。つまり、宮脇遺跡は六月坂横穴墓と併行期の集落であり、横穴墓の被葬者が居住していたことも考えられる。また、本遺跡から北西に約400m離れた付近には、須恵器顕著が見つかったとされる水ヶ迫横穴墓が存在する。このことから、六月坂周辺に横穴墓が群をなしていた可能性も考えられよう。

歴史的背景 六月坂横穴墓は大隅半島側では唯一の横

穴墓であり、横穴墓が数多く分布する宮崎平野地域から飛び地的に存在している。最後に、この地域に横穴墓が築造された歴史的背景について考えてみたい。

天武・持統初になると南島関係、特に種子島(多権島)に関する記事が増加するようになる。この背景について、中央政府の対隼人政策や南島支配の拠点とする目的のために種子島を重視していたことが指摘されている(中村1993)。

また、文武天皇2(698)年、南島での国制施行のための調査や遣唐使の南島路開発を目的(中村1993他)として南島観音使を派遣したが、文武4(700)年に羅州比良・久安・波斗、衣若原、そして肝衛難波が観音使を調効するという事件が起こっている。肝衛難波は肝杯郡などの大隅半島南部を拠点とする隼人の有力者と考えられている(中村1977)。

つまり、對肝衛氏、そして種子島との地理的・歴史的関係からも、中央政府はこの志布志湾北岸城を重視していた可能性が指摘できる。そして想像の域を超えないが、この要衝地であった志布志地域に宮崎平野から有力者が派遣されて、宮脇遺跡周辺に居住し、そして六月坂の横穴墓群に葬られたことも考えられよう。

(脚)

1) 桥本道也氏は、南海産貝製品の存在から九州における古墳時代前・中期交流のメインルートを東京ルートと指摘しており、東南九州に関しては「宮崎平野・志布志沿岸・種子島」というルートを想定している(橋本2010・2012)。

(主張参考・引用文献)

今里豊行・松永寿2002「古日における古墳時代中~後期の土器群」『古墳時代中~後期の土器群』解5第九州前後墳研究会発表資料叢書

大阪府立考古学研究所2006「年代のものさし~陶器の抵抗式~」

九州前方後円墳研究会2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第2回分

佐藤隆2013「鹿児島県の斎賀原からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要2』

佐藤隆2004「8世紀の須恵器編年と其流派、手続式並行關係」『大阪歴史博物館研究紀要3』

志布志市教育委員会2012「史実遺跡」志布志市歴史文化財発掘調査報告書7

志布志町教育委員会1982「志布志の郷土史叢書」第2集

門迫照三1981「須恵器大系」角川書店

小林明義1977「隼人の研究」学生社

小林明義1993「第三章隼人と南島」隼人と倭今國家」名著出版

中村明海1978「和歌山県鹿尾郡上野村の坊院跡」『南島』Ⅱ 大阪府教育委員会

木山修一2009「隼人と古代日本」河出社

西広海1976「第V章考索 第2土器」「宇城家先祖調査報告書」奈良国立文化財研究所解説

西広海1978「上春の時期区分と型式変化」『飛鳥・奈良京発掘調査報告書II』奈良開拓立派研究会所蔵31

橋本道也2010「第3章鹿児島地域の古泊号代墓制と地域間交流」『鹿児島加世田與山吉塚の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告4

橋本道也2012「九州南部と古墳文化」『古墳時代の考古学』7 同成社

橋本道也・森井大輔2007「八月坂横穴墓」『古墳以外の墓葬による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館

森山良一1997「北九州市・生糸地の祭祀ー」「古代の上古研究ー嘗命の式・御式の西・

木系 7世紀の土器ー」古代の土器研究会第5回シンポジウム

図 版



①遺跡近景（東から）



②1号横穴現況（南から）



④2号横穴前庭部トレンチ（南から）



③2号横穴現況（西から）



⑤1号横穴内状況（南から）



⑥1号横穴内状況（南から）

図版 2





六月坂横穴墓出土遺物

图版 4



1



3



1 内面



3 内面



1 底外面



3 底外面

六月坂横穴墓出土土器



2



4



2 内面



4 外面



2 底外面



5



5 内面

六月坂横穴墓出土遺物・参考資料

図版 6



6



7



6 内面



7 内面



8



9



8 内面



9 内面

六月坂模穴墓出土須恵器

報告書抄録

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
市道水ヶ迫線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（伝）六月坂横穴墓

発行年月

2013年3月

編集・発行

鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192

鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号

TEL 099-472-1111 FAX 099-473-1880

印刷所

有限会社志布志新生社印刷

〒899-7103

鹿児島県志布志市志布志町志布志 3223-7

TEL 099-472-2422 FAX 099-473-3250